

シリーズ第5作

# 教えられなかった

# 戦争 中国編

## — 侵略からの解放・革命 —

明治以来、他国を侵略して経済発展を続けている日本  
帝国主義列強の侵略と闘い、人民を解放し、階級のない社会をつくりだした中国

### ■スタッフ

製作・撮影 高岩 仁  
撮影助手 小林 明  
編集助手 横手三佐子  
助言 川崎 晃暉  
コーディネーター 李 楼  
長沼 仁  
整音 菊地 信之  
デザイン 篠崎 康行  
ナレーター 常松理美子

### ■お話を撮影した方・日本人

元中国帰還者連絡会の方 15名  
元満蒙開拓青少年義勇軍隊員 1名  
元731部隊員 1名  
元中国人民解放軍兵士 5名

### ■お話を撮影した方・中国人

成坑労働者 1名  
農民 4名  
万人坑記念館の方 2名  
元抗日義勇軍兵士 1名  
八路軍兵士 1名  
元解放軍兵士 2名  
共産党員 1名  
社会科学院の方 4名  
ガイド 1名

企画・製作・著作 映像文化協会  
協力 中国大使館/日中友好協会/撫順の奇蹟を受け継ぐ会/クラウン観光社/  
教えられなかった戦争シリーズ製作上映実行委員会

• ドキュメントビデオ 1時間38分

日時：2018年6月28日（木） 18：30～

会場：川崎 中原市民館 視聴覚室

主催：日中友好協会 神奈川県連合会 （協力：高津区革新懇）

【監督略歴・作品紹介】  
高岩仁(記録映像作家)



1935年福岡県生まれ。東映勤務を経て、1969年にフリーカメラマンとなる。

1980年代、ベルトルト・ブレヒトの『戦争の存在を人々に伝えることも重要だが、なぜ起こるのか、誰が戦争を必要としているのか、根絶するにはどうしたらよいか、それがないと真実を伝えたことにならない』という戦争の見方を知り、それ以来、日本の侵略戦争をこの観点で描くことをテーマとする。

1992年『教えられなかった戦争』シリーズ第1作・マレー編。その後、フィリピン編、沖縄編、第二の侵略、中国編を製作。

2008年1月29日急逝。72歳。『教えられなかった戦争・朝鮮編』を準備中だった。撮影・監督作品の主なものとして、「どぶ川学級」「公害原論」「水俣一揆」「解放の日まで」「アジアとの友好のために」「土地の日」「ユンカーさん」「日の丸・君が代」「戦争案内」他。

— 中国編の製作・編集に寄せて — (2005年製作)

敗戦から60年を経た今日、日本社会では首相の靖国参拝が繰り返され、政治家や財界人による侵略戦争を美化する発言が大手をふるい、自衛隊が派遣され、究極として平和憲法の改悪が目指されています。戦争を必要とする者はだれか？ それは昔も今も変わらず、自らの利益追求だけにひた走る財閥・資本家です。

日本の敗戦に際しては、アジアなど他の国に捕らえられた戦犯971人が死刑判決を受けました。しかし日本が最も多くの人を殺戮し、略奪を繰り返した中国では死刑や無期懲役を受けたものは一人もいません。

“たとえ戦犯であっても、みな人間である。人間である限り人格を尊重し、反戦平和のために戦う人間に戻れる” 私たちは、中国のこの政策から、今深く学ぶ必要があります。

映画「教えられなかった戦争 中国編」の作品紹介

高岩仁監督の作品は、戦争の実相を知らせるだけでなく、「なぜ起き、誰が必要とし、無くすにはどうすべきか」を追及し、現代のアジアへの経済侵略や、人権侵害、環境破壊につながっていると見る視点が、他のドキュメンタリー映画にない大きな特徴です。マレー編、フィリピン編、沖縄編、(アジアに対する)第二の侵略編、中国編等があります。

この中国編では日本人、中国人の双方の証言が語られます。例えば、中国農民が開拓した農地をただ同然で奪った後に入植した開拓団、生産される大豆、綿花を軍の強制力で大量にかき集め、欧米にも輸出する三井・三菱等の日本商社といった証言が、集積した物資の山の写真とともに語られます。更に炭鉱で非人間的な過重労働に苦しんだ少年、米麦を食べて経済犯として殺された人、父親を拷問で殺された人、あらゆるものに課税され、全ての食料を奪われた生活、等々の中国側の悲惨な実態の証言が語られます。

中国・朝鮮・韓国・アジアとの信頼される友好関係を築くために私達は何をなすべきか、改めて深く考える機会になると思います。

### 製作の動機と作品を貫く考え方

作品紹介に書きましたように、高岩監督の【教えられなかった戦争】シリーズは、数ある戦争を描いた他の作品にみられない特色を持っています。では、この希有な作品群はどのようにして出来上がったのか？ 高岩仁監督の著書『戦争案内 映画製作現場 アジアからの報告』（映像文化協会発行）から、製作の目的と動機を見てみましょう。

最初、高岩監督がこのシリーズを始めた時、アジア太平洋戦争時にマレーシアで日本軍が行った侵略の実態を、その体験者の証言が聞けるうちに記録して、歴史的に残しておこうという考えでした。このため、筑波大付属高校の高嶋伸欣先生に会います。先生はマレーシアに何度も通い、住民との信頼関係を一つ一つ積み重ね、中国系住民に対する無差別な大量虐殺の証言を引き出してきました。更に、生徒に「なぜそんなことが起きるのか、その原因を教えてください」と言われたのをきっかけに、戦争原因の追求も重要テーマとしていました。

戦争の原因！ 戦争は誰が必要として起こすのか？ 戦争と言うと今まで、（被害の）悲惨さや残虐性の追求が主で、最近になってようやく加害のことが追及されるようになりましたが、戦争の原因についてはあまり追及されていないのではないのでしょうか？

戦争原因の追究は、監督にとっても以前からの重い課題でした。ブレヒトの『戦争案内』と言う本の中で、ヒットラーの写真に付けた詩で、

「この男が危うく世界を支配しかけた男だ。人民はこの男に打ち勝った。だがあまりあわてて勝利の歓声をあげないでほしい。この男が這い出してきた母体はまだ生きているのだ」と言う。つまりファシズム・軍国主義というものは、資本主義が必要とした時に生み出されるもので、資本主義が存在する限り、ファシスト・軍国主義者が這い出してくる可能性は



残っている、安心してはいけないと警告している。

高岩監督が戦争の原因を追究する映画を作る直接的なきっかけは、フィリピンの歴史学者レナト・コンスタンティーノ氏にインタビューしたときのこと。「日本人は一度も自国の歴史を正しく理解したことがないのでは？」と問いかけられます。

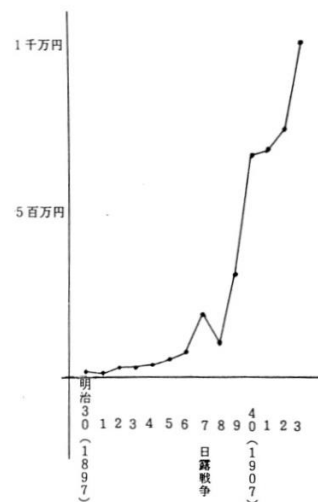
「日本の歴史書や歴史教科書を沢山調べましたが、今まで日本がアジアに対する侵略戦争の張本人を、全て軍人や政治家として描いています。しかし基本的に軍人や政治家は、金で操られた操り人形の役をしたに過ぎません。戦争を必要として計画して、金で軍人や政治家を操って、莫大な利益を上げてきたのは財閥・資本家ですよ。しかし、日本の歴史書にはこのことは

どこにも書いてありませんね」と言われたのです。フィリピン大学や経済学研究所でも同様のことを言われたそうです。

右上の図はこのことを象徴する歴史壁画で、マニラ市庁舎の大ホールにあるそうです。民衆を踏みつけて万歳をする兵士たち。後ろでほくそ笑む天皇。更にそれ等を操る黒く不気味な妖怪たち。この妖怪こそ財閥・資本家。このことがあって、戦争の本当の原因は何かを追求するこのシリーズとなったそうです。

日本は、平頂山事件や三光作戦のように軍が中国国民を残酷に殺したわけではありません。日本の民間会社は、更に多くの人々をただ同然で、非人間的な過酷な労働をさせ、軍より遥かに多くの人々を過剰労働で死なせています。この遺体を積み上げた場所が「万人坑」であり、中国各地至る所にあります。こうして蓄積された資本が日本の戦後の成長の基になっているのです。

一例として三井物産の対外輸出額のグラフを載せます。日露戦争を契機に、急激なカーブを描いて、業績が伸長。これが戦争を推進する原動力となりました。(福島)



三井物産の対外輸出額・日露戦争前後

問合せ先：日中友好協会神奈川県連合会 川崎支部準備会

大森 090-2534-0128

福島 080-5170-8119